

特別講義

東南アジア・ASEANの可能性と日本の関わり
——たとえばグローバル化するフィリピンの例から考える

京都大学東南アジア研究所 清水 展

編集委員会注：本特別講義は、2016年7月6日(水) ワンアジア

講師紹介

今回の講師には、京都大学東南アジア研究所の清水先生をお招きいたしました。清水先生の所属する東南アジア研究所というのは、半世紀以上の歴史を持ち、日本地域研究の拠点としては非常に有名な、最先端を走り続けた研究所で、第二次世界大戦が終わって、日本が中国大陸へのアクセスを失ったとき、東南アジア研究所が実質上、日本を代表するアジア研究の拠点として活躍したことで著名でもあります。

その東南アジア研究所の所長を2015年までお務めになられております。ご専門は文化人類学。これまでいろんな先生がお見えになりましたけれども、文化人類学をご専門の先生は初めてではないかと思います。ちなみに、文化人類学というのは、異なる言語、異なる文化を持つ人々を比較研究することによって、その人々の生活、社会について考える、そういう学問です。

先生のご専門とするのはフィリピン、東南アジアです。これまでもいろんな先生をお招きしましたが、中国あるいは韓国を中心にした先生が多かったかと思います。そういう意味では、東南アジアの専門家をお招きしてお話を聞く貴重な機会だと思います。皆さん、よくお話を聞いていただければと思います。

最後に、時間がありましたら、Q&Aの時間を取りたいと思いますし、また、皆さんに課題を提出していただくことになりますので、よくお話を伺ってください。

【清水先生】

清水です、こんにちは。あとでQ&Aの時間が取れるといいですね、せっかくの機会なので。でも、東南アジアについてお話したいことがいっぱいあります。質問時間を確保するために、しゃべり過ぎないように注意します。

私は京都大学の東南アジア研究所に10年前に移ったんですけれども、その前ま

では九州大学教養部で21年間教えていました。皆さんは今、1、2年生かな。3年生はいないですね。こういう感じのところで、でも、もっと大きな教室で200人ぐらいの学生がいました。フレッシュな学生が多いのは懐かしくて、いいですね。

九州大学では法学部、経済学部、文学部、工学部、農学部、医学部に進学するクラスの一般教養の文化人類学を担当しました。学部によって教室の雰囲気がまったく違うのですが、同じ学部でも年によってもかなり違いますね。一人ひとりの総和がそれぞれ固有の雰囲気を作り出す、という感じです。今日は、女性が多いですから、文学部に似ているかな。5限なのでつらいかもしれませんが、なるべく眠らないで聞いてください。もっとも授業中に眠ってしまうのは、半分は教師が悪いでしょうから、そうならないように一生懸命お話しします。

今日は大きく分けて二つの話をしようと思います。順番は前後しますが、以下のトピックです。

1つ目は、私自身が所属する研究所が調査・研究の対象とする東南アジアについてです。今では、政治経済的なまとまりとしてASEANと呼ばれることが多いです。東南アジアというと地理的な範囲として生態や環境も含みます。その東南アジアは、1960年代後半から1970年代前半のあいだ、アメリカが全面的に介入したベトナム戦争の戦場になりました。第二次第戦後の米ソの冷戦体制の中で、実際に熱い戦争が戦われた戦場になったわけです。1975年にアメリカはベトナムから完全に撤退しますが、その後も1980年代のあいだカンボジアの内戦や中国とベトナムの戦争などが続きました。けれども1990年代に入ると、ようやく平和が戻り、地域が安定し、今では日本にとって、政治的、経済的に重要なパートナーになってきました。これからは、もっともっと重要になってくるだろうというお話をします。今日の講義を聞いている皆さんのなかにも、将来は東南アジアのどこかの国で働く、という人がたくさん出てくるでしょう。あるいは会社の同僚や近所の住人に東南アジアからの人が増えてくるでしょう。ですから、案外と将来の人生や生活と関係してくる話になると思います。

2番目は、フィリピンの文化と社会についてお話します。なぜフィリピンの文化と社会についてお話するかというと、東南アジアの一つの将来の可能性というものを体現しているからです。特に今日のグローバル化という時代、つまりヒトとモノと情報が大量に動く時代、あるいはネオ・リベラルと呼ばれる経済システムにかなりうまく適合しているのが、フィリピンとシンガポールでしょう。フィリピンは、私自身が研究対象としているので、東南アジアのなかでもいちばん深く詳しく分かっていますので、フィリピンを取り上げて、日本と違うなあ、でも

同じところもあるんだなあ、ということを理解していただけたらと思います。

1. グローバル化時代の成功例としてのシンガポール

まず最初のきっかけとして、シンガポールを事例にして、東南アジアが案外とすごいぞ、ということをお話しましょう。フィリピンの前の前座みたいな感じで。

皆さんのなかには、将来、留学をしたいと考えている人も多いかなと思います。ならば、お勧めはシンガポールです。アメリカもいいかもしれませんが、遠いですしこれからのことを考えると、シンガポールをお勧めします。かつて資源がないから日本は人材育成と国際貿易で生きてゆく戦略を採ったのですが、今のシンガポールがそれと似たようなことを、もっとラディカルに推進してかなり成功しているからです。

シンガポールは550万人ほどの人口の小さな国で、香港の700万人よりももっと少ないです。けれども、国民1人当たりの所得が52,000ドルで、アメリカに次いで世界で第9位です。ちなみに一番豊かのは北欧のノルウェーで94,000ドル、日本は24位で36,600ドルです。ちょっと難しい表現ですが購買力平価という、現地の通貨で実際にどれくらいのものが買えるか、たとえばマックのハンバーガーが幾らで変えるかという指標でいえば世界第3位になります。シンガポールがマレーシア連邦から独立した1965年、というか追放されたようなものですが、その頃はとても貧しかったです。それが、今では少なくとも経済的にとてもうまくやって発展しています。

今、急速に私たちの生きる世界を変えていっているグローバル化やネオ・リベラル経済にもっともうまく適応しているのがシンガポールと言えます。世界銀行の『ビジネス環境の現状』報告書では、シンガポールは9年連続で世界で最もビジネス展開を進める環境が整備されている国とされています。もっとも経済第一でいいのか、っていう根本的な疑問はありますが。いずれにしても、世界の動きと、その対応法を学ぶうえで、シンガポールを見ておくことはとても参考になります。

もう一つは、シンガポールはとても安全です。この頃、世界中のいろいろなところでテロがありますが、シンガポールは治安がとてもいいです。女性が夜、一人でも歩けます。私の娘がシンガポールで勉強して、そのあとシンガポールで数年ほど働いたんですけれども、夜中でもレストランに行って、二次会で飲んで、帰るときにタクシーを携帯で呼べば、タクシーが来て、一人でも乗っても安全でした。シンガポールは豊かな国で、とても効率的で、安全です。

留学を勧める3つ目の理由は、今、日本の大学は文部科学省からの指示という

か指導によって、グローバル化という世界大競争の時代を生き抜く工夫と努力を迫られています。研究面とともに、教育面ではグローバルに活躍できる人材を育成しなさい、と奨励しています。それで日本の大学は、グローバル化のための改革を一生懸命にやっています。にもかかわらず、日本の大学は、軒並み世界の大学のランキングでじりじりと落ち続けています。研究と教育の両面で、外から見ても、評価と魅力を失ってきていると言えます。

タイムズ・ハイアー・エデュケーションという最も影響力のある大学評価機関によると、2016年の世界の大学ランキングの1位はオックスフォード大学、2位はカリフォルニア工科大学、3位スタンフォード大学、以下、アメリカとイギリスの大学が並びます。アジアからは国立シンガポール大学がトップで24位、同じくシンガポールの南洋理工大學が54位、それぞれ日本の東京大学39位や京都大学91位よりも高く評価されています。ちょっと驚くでしょう？しかも日本の両大学は、じり貧でだんだんと評価が下がってきていますけれども、シンガポールの両大学は右肩上がりで上がっています。悲しいし残念ですけれども厳しい現実を知っておく必要があります。

皆さんは今までシンガポールに行ったこともないし、関心もなかったでしょうけれども、アジアで一番豊かな国、安全で将来性があります。そういう意味で、留学のことを考えるなら、シンガポールも候補に入れて、大学を考えたらいいと思います。

では、なぜ、シンガポールは経済がうまくいっているか、あるいは大学がうまくいっているかという疑問がわきますよね。その理由のひとつは、小学校から受験戦争が厳しくて、小中高大とあらゆる段階で選別をして、優秀な人材をふるいにかけて選別してゆく。そして高卒段階の全国試験で一番優秀な20人ほどをアメリカやイギリスの大学に奨学金を与えて送り出す。卒業したら、奨学金のしほりで10年くらいは政府で働く。けれども公務員の給料がすごく高いから、政府でも一所懸命に働く。年季奉公の期限が来て自由になったら、民間に移ってさらに高い給料をもらい、そして政府の役人だった頃の経験とネットワークを活かし、官民が一体となって経済を運営してゆく。そうした社会エンジニアリングというのでしょうか、社会を効率に動かしてゆくノウハウと仕組みを蓄積してきたことが大きな強みになっています。

こうした激しい受験競争とか選別教育とか、日本にはなじまないでしょう。シンガポールが上手く行っているからと言って、そのまま真似をすれば良いわけではありません。ただ国民が、皆さんが、どんな生活をしたいか、そのためにどんな社会がいいかを考えるための参考にはなるでしょう。

2. フィリピンの魅力と面白さ

ただし大学に留学して勉強するならばシンガポールがお勧めですが、実践的な英語を身につけようとするならばフィリピンがお勧めです。英語なら「本場で勉強しよう」と言って、アメリカやイギリスやオーストラリアに行ったりする人が多いかと思います。でも、そうした国に行っても、なかなか身につけません。だいたいパック旅行の集団留学で、日本人のグループが10人くらい集められてグループになり、教室にいるとき以外は、日本人同士が日本語でだべっていたり、観光旅行に行ってしまう。だから力がつかないんですね。

その点でフィリピンがお勧めというのは、教師の人件費が安いせいもあるんですが、個人授業とか少人数で外国人に英語を教えるシステムがしっかりしています。ちゃんとした語学学校では、朝から晩まで脳みそがしびれてくたくたになるぐらい英語漬けの濃密集中特訓をしてくれます。もちろん、ちゃんとした語学学校を選ばなければいけません。

それから、英語というのは通じればいいので、キングズ・イングリッシュとか、クイーンズ・イングリッシュとか、正統のかっこいい英語をしゃべる必要はありません。今、英語というのは欧米圏の力を体現し支配を押し付ける強者や支配者の言葉ではなくて（そういう面も確かに残っていますが）、アジアの中の共通言語になってきています。アジアの国々が、ビジネスの話、政治の話、学問の話をするときに、英語が共通語になっています。そうしたときに正しい発音とか文法とかいう、格調高い英語などということを求めずに、英語を話せるようになる。コミュニケーションの手段として、実践的で実用的な英語をほんとに修得しようと思うならば、フィリピンがお勧めです。おおよそフィリピン人の教師は、明るくて友好的、社交的ですから、生徒の側が気後れすることがなく気楽にどんどんしゃべろうという気になります。

私自身が東南アジア研究者で、主にフィリピンのことを40年ぐらい研究しているので、ついつい身びいきになってしまいます。けれどもフィリピンの英語というのは、日本人にとって聞きやすい、分かりやすいと思います。それに外国人に英語を教えるメソッドがしっかりしています。何よりもフィリピンは日本とほとんど同じ1億人の人口がいて、そのうちの1割、1,000万人を超える人達が出稼ぎや移民などで海外に出て働いています。フィリピンの日常生活のなかで英語が普通に使われていますから、英語を身につける場所として都合良いです。フィリピンは、ある意味でグローバル化の波に乗っているというか、巻き込まれているというか、信じられないぐらいのとんでもない割合で国民が海外に出ています。それは、一面では頭脳流出、技術者・専門家の流出という負の側面も大きいです。

が、同時に、そうした海外からの仕送りが国家の歳入の2～3割を占めて国民経済に大きな貢献をしています。

2013年の時点で、1億人のうち、約1割の1,023万人が海外で暮らしています。渡航先は、アメリカが353万人と最も多く、次いで中東地域です。千万人のなかには、渡航先の国で永住権を取って住んでいる人もありますが、多くは何年かの契約で出稼ぎにゆく人たちです。2013年には224万人が長期に海外で働くために出国しています。海外に働きにゆくフローが毎年200万人あまり、そして海外に住む／働く人達のストックが1,000万人ということです。フィリピン人は公用語の英語が堪能で、世界中で看護師や技術士、技師、船員、ホテルの従業員などとして働いています。ホワイトハウスの料理長がフィリピン人の女性であることも知られています。日本の商船会社の乗組員の7割がフィリピン人ですし、日本郵船という日本の最大の海運会社は、フィリピンに商船大学を設立して、フィリピン人船員を自ら養成して確保しています。

フィリピン中央銀行によると、2015年のフィリピン人出稼者からの送金額は、前年比4.6%増の257億ドル、約3兆円の出稼ぎ収入になっています。2014年の輸出総額は618億ドル、前年比9%増。日本はフィリピンにとって最大の貿易相手国であり、また最大の投資国になっています。

なぜ1億人のうちの1割以上が海外に働きに出ていけるのかというと、理由の一つには国内に十分な職場がない、あっても給料が安いということがあります。それと大きいのは、先にも触れたように、学校教育とマスメディアを通じて、ほとんどのフィリピン人が英語を理解し、しゃべれるからです。フィリピンの人たちは、英語さえ話せば世界中どこに行っても働ける、困ったときには助け合えばいいし、さらには受け入れ国でも英語を話せばコミュニケーションができて助けてもらえるという、根拠なき確信というのか信頼感があります。英語力への信頼はとても大きいのです。

もう一つフィリピンの特徴は、キリスト教徒が多いことです。総人口1億人の85%がカトリック、5%がプロテスタント、合わせて9割がキリスト教徒です。そして出稼ぎ先の国で、地域の教会を核とする現地のネットワークが、そうした出稼ぎの労働者を支えてくれていますし、緊急時には助けしてくれます。出稼ぎ労働者の日曜や休日の過ごし方としては、まず教会の英語のミサに出ます。ときには神父さんに罪を告白したり、つらいことを話したりするけれども、そのあとにフィリピン人同士が集まって情報交換をしたりします。そうした教会のネットワークに支えられて、世界中の各国がフィリピン人のたくさんの労働者によって経済が成り立っているし、逆にフィリピンの経済もそうした出稼ぎ労働者の送金

に支えられているのです。

もう30年近くも前ですけど、私が福岡に住んでいたときは、カトリック大名町教会に時々行っていました。そこの英語ミサは大体フィリピン人が3分の2ぐらいで、100人ぐらい集まりました。ミサが終わると20～30人ほどがそのまま残って、ロビーで持ち寄ったクッキーなどを食べて、おしゃべりして情報交換をしていました。それは彼ら、彼女たちにとって大きな楽しみであり、またいざというときの互助組織にもなっているんですね。私はカトリック信者ではないですけど、フィリピン人と友達になって家族で教会に行っていました。

フィリピンはまさにグローバル化の時代をうまく波乗りして、便乗して生きているということもできるでしょう。昔、20年ぐらいまでは、日本とフィリピンを比べると、日本は経済発展の優等生、フィリピンは劣等生というか落ちこぼれのようなイメージがありました。優等生というのは、明治維新以来の国づくり、国民国家形成、英語ではネーション・ステート・ビルディングというんですけども、それが非常にうまくいったという意味です。1941年12月にアジア太平洋戦争に突入してアメリカと戦い、1945年8月に敗れて無条件降伏した後も、焼け跡闇市のなかから戦後の復興から高度経済成長へ、そしてバブル経済へと急成長を続けてきました。

でも、若い皆さんが実感しているように、そうした国民国家建設と経済成長の大成功という日本の良い時代は過ぎ去ってしまいました。

一方フィリピンは、今は貧しいですけども、(貧しいと言っても金持ちは僕らよりもすごい金持ちで、プール付きの豪邸に住み、何人ものお手伝いと運転手を使った生活をしています)、アキノ大統領の時代には政治が安定し、経済も5～6%で順調に成長し、国民の多くが明るい未来を確信しています。かつての近代化と国民国家建設では、日本が優等生でフィリピンは劣等生や落第生だったのですが、それが今や変りつつあります。国民国家建設と国民経済発展という点では、東南アジアで社会主義のベトナムやラオス、ミャンマー、カンボジアなどに近く、ビリの近くを走っていたフィリピンが、グローバル化の時代に入って、いつの間にか徐々にトップ集団との距離を詰め始めてきました。比喻的に言えば、1週遅れのトップランナーになってきた、という感じです。

400メートルトラックの競技場の5,000メートルや1万メートルの競走で、ビリを走っていたランナーが、いつの間にか1週遅れのトップランナーになっている。ビリに近かったのが、1周近く先行しているトップに追いつかれて抜かれそうになったときに、急に力を出してダッシュして、抜かれずに本当のトップのちょっと先を走っている。そのままの状態を静止画でみると、まさしくトップランナー、

グローバル化という新しい時代に新しい社会と未来を拓いてゆくトップランナーがフィリピンだ、というのが私の実感です。

3. 世界と日本にとって大事な東南アジア

フィリピンにはまた後ほど戻ることにして、これからは、「なぜ、今、東南アジアあるいはASEANが大事なのか」という話をします。ASEANというのは、この地図にありますように、東に中国があり、西にバングラデシュあるいはインドという二つの大国に挟まれた地域のことをいいます。この二つの大国は、中華文明とヒンドゥ文明という大文明を数千年にわたって築き上げて今に至ります。過去200年ほどは、産業化と近代化に成功した西欧の支配や収奪に苦しみ、遅れた国というイメージがあるかもしれませんが、これからの世界の政治経済にとって、とても重要な役割を果たすプレーヤーになってゆくでしょう。

東南アジアは、その両大国に挟まれたというよりも、両国をつなぐ地域、緩衝帯、媒介者というような位置づけと考えたらいいと思います。地理的には、九州から、南に下がると沖縄があり、沖縄からさらに南に台湾があり、台湾からさらに南に行くとフィリピンとインドネシアがあり、その西の大陸部にはベトナム、カンボジア、ラオス、ミャンマー、タイなどがあります。地域的には東南アジアですけれど、最近ではアセアンと呼ばれることが増えています。ASEANというのは Association of South-East Asian Nations。Association というのは、連合とか連盟。東南アジア諸国の連合がASEANです。このASEANがこれからすごく重要になります。

例えば昨年2015年は、ASEANが一つのコミュニティー（共同体）を作りましょうということに合意して、そういう方向で着実に動き始めました。たとえばフィリピンは、あるいはほかの国でもそうですけれども、ASEANとして足並みをそろえるために、夏休みが終わって新学期を9月に統一しました。そうするとASEANの各国の大学間で学年暦が同じになりますから、すごく留学しやすくなります。日本で留学すると1年の留年を余儀なくされるとか、学年歴の違いによって大変なんですけれども、ASEANはそれを統一しました。あるいは短期の滞在ならばビザなしで入国できるようになりました。言ってみれば、EU（ヨーロッパ共同体）のようなまとまりを、遅れてこれから拡充してゆこうとするのがASEANです。

お配りしたB4班のプリントに詳しい資料を幾つか載せてありますけれども、ASEANは10カ国からなり、合わせた人口が6億2,000万人。日本は1億人弱ですから、6倍の人口がです。つい1週間ほど前、イギリスがEUを脱退すること

が大きなニュースになりましたけれども、EU よりも ASEAN のほうが人口が多いのです。EU は5億人ぐらいです。面積は、ASEAN は433万平方キロで日本の12倍なんですけれども、EU はほぼ同じ、日本の11倍、ASEAN より少し小さいぐらいです。EU は28カ国、イギリスが脱退すれば27カ国になりますが、ASEAN は10カ国なので、そういう意味では少ないです。

でも ASEAN の特徴は何か、EU の特徴と比べて何が違うかという点、まさにこの学部が名称として付けているような多文化共生が ASEAN なんですよ。この点はとても大事です。多文化共生というのは、例えば私が研究しているフィリピンは1億人の人口を持ちますけれども、人口の9割がキリスト教徒、カトリックが85%でプロテスタントが5%。インドネシアは2億3,000万人の人口を持ちますけれども、9割近くがイスラム教徒でイスラム教徒が圧倒的なマジョリティの国です。

イスラム教というと、例えばイラクとか、イランとか、サウジアラビアという国々を思い浮かべますけれども、世界最大のイスラム国はインドネシアなんです。イスラムというと、ダッカのテロやシリアの内戦、IS（イスラム国）といったことと結びつけられがちです。けれどもインドネシアは、世界最大のイスラム人口を擁しながら、今のところそうした過激なイスラム・グループによるテロの問題がそれほど深刻ではない。言ってみれば、穏健なイスラム教徒が近代的な市民社会というものをつくり、政治的な安定と経済的な発展をしているのです。

フィリピンも、カトリック人口としては世界有数の人口を擁しています。東南アジアはそうしたインドネシアのほか3千万人の人口を有するマレーシアも過半がイスラム教徒の国ですから、両国を合わせてのイスラム人口が2億5千万人を超えます。東南アジア島嶼部では、イスラム教とキリスト教がマジョリティですが、大陸部のほうでは、皆さんもご承知のように、タイやカンボジア、ラオス、ミャンマーなどは仏教の国です。さらには、イスラム教やキリスト教より古くからインド・ヒンドゥー教や中国の道教の影響を強く受け、世界の主要宗教のすべてが東南アジアにあって、それでいながら宗教ゆえの対立や紛争というものがそれほど激しくならない。多民族と他宗教が共存しているところです。

それはヨーロッパ・EU とは全然違います。EU は28カ国ありますけれども、基本的にはキリスト教徒がマジョリティの地域です。トルコがEU に加盟できないのは、恐らくトルコがイスラム教の国だからではないかと思っています。何だかんだいろんな理由を付けてますが、実はイスラム教だからというのが本音なのではと私は疑っています。そういう意味でEU は、国の数こそ多いけれども、割と単一の文化、すなわちキリスト教をベースにした連合といえます。それと、イギ

リスの清教徒革命やフランス革命を「近代市民社会」の出発点としているという点でも共通性があります。

それに対して東南アジアというのは、世界三大宗教が全部あり、そのほか多言語、多文化、多民族がばらばらというか、文化に限らず自然もそうですが、いろいろな要素がたくさんあります。歴史的に見れば、タイを除いて、東南アジアの諸国はフランス（ベトナム、ラオス、カンボジア）、イギリス（ミャンマー、マレーシア）、オランダ（インドネシア）、アメリカ（フィリピン）などの西欧列強に植民地支配され、その近代文明を取り入れてきました。われわれは、そのことを多元共生と呼び、それが一つのシステムをなして、東南アジア地域の柔軟でしなやかな社会のあり方を可能にしていると考えています。

しかも実は先ほども触れましたように、東南アジアは戦後ずっと、米ソの対立がもたらした冷戦体制の下で実際に血みどろの戦争が戦われた熱戦場だったのです。冷戦というのは、ソ連・中国の社会主義の連合と、アメリカ・日本・西欧などの資本主義の連合が対立して、それぞれ核弾頭ミサイルを何千発も持ち、もし戦争を始めてミサイルの撃ち合いをやったら、もちろん人類は即滅亡、さらに地球が1,000回ぐらい壊れてもまだ足りないぐらいの核爆弾を持ちながら、ジリジリとにらみ合っていた冷たい戦争状態のことです。幸い、米ソ間で実際の戦争が起こりませんでしたけれどアメリカを盟主とする西側とソ連・中国の東側との関係はそれだけ厳しかったのです。

その冷戦時代に、資本主義のアメリカと社会主義・共産主義のソ連・中国との厳しい対立の代理戦争の戦場となったのが東南アジアの国々だったんです。ベトナムは、今でこそ中国の南から南シナ海に沿ってずっとここまで南北に長く伸びている一つの国ですけれども、ベトナム戦争の時代までは、ちょうど今も朝鮮半島が南北で北朝鮮と韓国が分断されているのと同じように、ベトナムも南の資本主義と北の社会主義とに分かれて戦争をしていました。アメリカは南ベトナムを支援し、中国・ソ連は北ベトナムを支援して、そこで本当に熱い戦争が、殺し合いが行われていました。戦場となったベトナムの人々は何百万人もが犠牲となりました。

このベトナム戦争には、ベトナムだけではなくて、カンボジアもラオスの一部も戦場になりました。ベトナム戦争のころ、フィリピンでも、インドネシアでも、タイでもマレーシアでも、共産党が武力闘争をしていました。東南アジアの1960年代、1970年代、1980年代というのは、東西の冷戦体制の中で実際に戦争が行われた熱戦場、代理戦争の場となったわけです。

今、ASEAN という10カ国の連合も、本当はタイ、マレーシア、シンガポール、

インドネシア、フィリピンの資本主義の5カ国が、中国・ソ連の影響を受けたミャンマー、ラオス、ベトナム、カンボジアと対抗するため、経済協力をし、お互いに助け合いましょうという仲良しクラブとして1967年に組織したのが始まりだったわけです。要するに東南アジアというのは、資本主義と共産主義の陣営に分断されて、熱い戦争をしていたのです。

けれども、1990年代に入ってソ連とアメリカとの冷戦が終わりました。まず1989年にベルリンの壁が壊れ、1992年にはソ連邦が解体しました。冷戦が終わったあとには、もう代理戦争なんかやっている場合じゃないでしょう、という機運が東南アジアに生まれてきました。

タイのチャチャイ首相が、1990年代の初め頃、「戦場から市場へ」というキャッチフレーズを掲げて、「東南アジア地域の全体を、経済発展のための協力アリーナにしましょう」という提唱をしました。そのアイデアを、ADB（アジア開発銀行）が全面的にバックアップし、その頃からASEANはかつての敵であった国もメンバーに入れて協力関係を拡大し、経済発展してきました。そういう意味では、口先だけの多文化共生ではなくて、多文化そのもの、キリスト教、イスラム教、仏教、儒教という宗教、それに多様な言語・民族集団を包み込んで、ベトナム戦争時代の対立を乗り越えて、仲良く協力し合い、一緒に発展してきたわけです。

今の世界は、イスラムのテロや難民や移民の受け入れ拒否や排除など、多文化共生とは逆の流れが強くなっています。だからこそ、今、ベトナム戦争以後の東南アジアの共生と協力と発展の経験を学ぶことは大きな意味があると確信しています。皆さんは、せっかく多文化社会学部に來られたのですから、ぜひ東南アジアに関心を持って、勉強して、ぜひフィリピンやシンガポールに留学していただきたい、あるいはインドネシアでもタイでもどこへもいいですから、若くてしなやかな感性をもっているときに留学してもらいたいと思います。

留学には、多文化共生に関する感性や実感的理解を深め、自分自身を日本的な常識の束縛から解いて自由にし、前向き生きるという目的があります。それ以外に、就職やこれからの仕事場としてASEANが重要になってくるという実利的な面も大いにあります。なぜなのかというと、日本にとってASEANというのは政治経済、社会の死活問題としてこれからさらに重要になってゆくからです。

まずASEANの経済成長は目覚ましく、過去10年間でGDPが3倍ほどになりました。お配りしたB4のプリントの3枚目、14ページの右の上に「日本の対ASEAN直接投資」のところを御覧ください。日本の企業が、経済活動をして利益を得るために、資本をそれぞれの国に投下して工場をつくったり、操業したり

しています。そうした直接投資が、2014年の対中国ではグリーンの折れ線グラフで示されているように7,000億円ですが、オレンジの対ASEANはそれの3倍、25,000億円ほどになっています。2012年をきっかけに、日本にとっては中国よりもASEANのほうが将来性を見込んだ投資先としては重要な経済パートナーになっているのです。

去年、中国の爆買いがとても話題になり、そのおかげで日本の小売業は一息ついて万々歳ということで、日本は中国の経済成長に助けられているという印象を受けます。けれども日本の企業も明確に経営判断をして、中国一国だけを頼りにビジネスをしている時代は終わった、中国も大事ですけども、この先を考えて危険分散という意味で、これからはASEANも大事だという風になってきており、だから直接投資も増えているのです。「チャイナ・プラス・ワン」と言われたりしています。

なぜ中国の一人勝ちの時代が終わったのかというのは、一つは中国が経済成長をすることによって労賃が高くなってきていることです。日本の企業、特に製造業が中国に行ったのは、労賃が安いことが大きな魅力でした。けれども、中国の経済成長にともなって労賃も上がり、企業にとってのメリットがなくなってきたことが大きいです。

それと、もう一つは、中国は一般の人たちはそれほど反日的ではなくて、実際に留学してみると、いい人がたくさんいて仲良くなれるんですけども、政府の方針として、時に、反日とナショナリズムを切り札として、共産党政権の正当化を図ろうとします。共産党にとってはガス抜きくらいのつもりでも、過激な「暴徒」による日本の工場や商店への投石や焼き討ちがあったりして、スケープゴートにされてしまう。また、法律による法治がしっかりしていないので人治というか人脈・コネを頼らざるをえず、きわめて恣意的な経済運営や経営管理がなされ、ぜったいの信頼感を持ちにくいことがあります。日本の侵出企業にとっては安心して操業できないので、リスク分散としてより良い条件と将来性があれば東南アジアの方に移ろうとするわけです。

あともう一つは、これから中国でも一人っ子政策による少子高齢化が急速に進んでいくでしょう。日本では1990年代の半ばにバブル経済が破裂して、以後、高齢化の進展ともあいまって長期の経済不振に陥ったことが、遅かれ早かれ中国でも繰り返されるだろうことを心配しています。同じく長期的には、中国の環境問題も深刻です。日本の企業はそうしたことを総合的に判断して、これからは中国だけでなく、東南アジアも重要だ、さらにその次には、バングラデシュだ、インドだとリスク分散の先を求めてゆくでしょう。

また東南アジアは、経済だけでなく地政学的な意味で政治的にも日本にとって重要です。日本は中東から石油を輸入していて、それを運ぶシーレーンが通る南シナ海は、大陸部と島嶼部の二つの東南アジア世界を隔てる／つなぐ海域です。マラッカ海峡を抜けて、南シナ海を横切るこのシーレーンは、中国がほぼ全域を自国の領海と主張しており、フィリピンから米軍基地が全面的に撤退した1992年頃から軍事拠点の建設を始めました。ベトナム、インドネシア、フィリピンなどの国々から激しい抗議を受けながら、着々と実効支配を進めており、きわめて不安定な状況を生み出しています。

4. フィリピンと日本の関わり、あるいは恩讐を超えて

私は三十数年フィリピンの研究をしていますので、具体的にフィリピンの何が面白くて、そんなにダラダラと研究してきたのか、何が重要でどこが大事なのかということ、これからお話ししたいと思います。初めのところで、「グローバル化にうまく波乗りするトップランナーとしてのフィリピン」ということをお話したのですが、日本とフィリピンの関係はとても長く深い歴史があります。

この写真は見たことがあると思います。今年の1月に、天皇皇后両陛下がフィリピンに5日間出掛けられたときに、フィリピンの国民英雄であるホセ・リサールの像に献花したときの写真です。このように国賓レベルのVIPが、それ以外の重要人物でもそうですが、相手国を訪問したときには、最大の敬意の表し方として無名戦士の墓に花輪をささげるのが通例というか、多くなっています。無名戦士というのは名前がない。もちろん名前はあるのですが、本当に世間の片隅の市井の人たち、彼らが兵士として祖国のためにかけがえのない命を捧げてくれた。それは自分の妻のため、子どものため、彼らの未来のために体を張って戦い命を捧げて戦ってくれたのですが、それに対する敬意の表し方として、プロトコル（外交儀礼）では、無名戦士の墓に花をささげるのが普通なんです。それは、彼らが捧げた命の重さこそが、その国のかけがえのなさ、意味と価値のある実体としての国の尊厳を支え示す基礎となっているからです。

ただし、フィリピンの場合には、無名戦士の墓よりもホセ・リサールという国民英雄、19世紀末にアジアで初めてフィリピン革命というものが起きたときの思想的なリーダーであった人の記念塔に花輪を捧げるのが通例になっています。なぜ天皇陛下が80歳も過ぎてフィリピンに行ったのでしょうか？ 皆さん分かりますか？ それは、天皇陛下はご自分で戦争をしたわけではないのですが、父親の昭和天皇の名前の下に、アジア太平洋戦争を行ったからです。メインの敵はアメリカだったのですが、戦いの戦場は中国と東南アジア、とりわけ東南アジアで

日本の将兵がたくさん死にました。そういう兵士たちの慰霊、魂を鎮めるために、天皇陛下はこの数年、ご高齢をおしてパラオに行き、サイパンに行き、そして今年フィリピンに行かれたわけです。

そのときの写真がこれなのです。なぜフィリピンが最後になったかという、日本の兵士も大勢亡くなっていますが、それ以上にフィリピン側の犠牲者が断然に多く、戦後長く反日感情がきわめて強かったからです。アジア・太平洋戦争（1941年12月～1945年8月）のとき、フィリピンには日本の将兵60万人が送られました。それはフィリピンがアジアで唯一アメリカの植民地であり、アジアにおけるアメリカの一大拠点だったからです。

長崎市の人口は何万人かな。40万人ですか。長崎市の全部の人口を送り込んでも、まだその5割が足りないという兵隊を送って、そのうちの50万人弱が戦病死しました。すごい損害なんです。しかも敵と戦って戦死したのではなく、敗色が濃くなってからは、マラリアや赤痢で病死したり、食べ物がなくして餓死したりする場合が圧倒的に多かったのです。アメリカは物量作戦で勝利したと言われていきますけど、当たり前なんですね。戦争をするためには、飛行機や艦船、軍用車とそれを動かすための油、各種兵器と鉄砲や大砲の弾、さらには兵士が食べる食料をちゃんと用意しなければなりません。そうした物資のサポート体制を兵站、ロジスティックスというのですが、その兵站の考え方が指導者のレベルでほとんどいい加減なんです。

戦争で一番大事なのは適確な戦略・戦術の立案とそれを実行する部隊・兵士をサポートする兵站・ロジスティックなんです。ちゃんと毎日、食べる物・飲む水があって初めて、兵士としての訓練と力量を最大限に発揮できます。昔から「腹が減っては戦はできぬ」と言われてきているんですけどね。でも日本軍の司令部は、兵站を確保しないまま「現地自活」などという方針のもとで、部隊を進ませたのです。自分で食料を見つけて確保せよというのは、その辺に生えている野草を食べて戦えというに等しく、仕方なく一般住民の食料を略奪して反感を招くか、それでもできなければ餓死するしかありませんでした。そういうとんでもない戦争をやらせたから、フィリピンに派遣された60万人のうち50万人が戦病死したわけです。そういう無念の思いで亡くなった兵士を慰霊するというのが、天皇陛下がフィリピンに行った目的でした。

先の大戦で日本兵が一番たくさん死んだのがフィリピンでした。でも、それ以上に死んだのがフィリピン側なんです。フィリピン側は、フィリピン政府の公式発表によれば110万人が犠牲となっています。しかも彼らは、ほとんどが戦闘の巻き添えとなった一般市民であり、ゲリラと疑われた民間人でした。自分の国を

戦場とされ、しかも日本の将兵の2倍もの犠牲者を出しているのですから、フィリピン側の反日感情の強さは推して知るべしです。私が1970年代の末にフィリピンに2年半ほど留学したとき、マニラではそれほどでもありませんでしたが、友人とともに地方に遊びにいったりすると、自分の親戚身内が殺されたとか、拷問を受けたという人が周りにたくさんいました。でも、そういう激戦地だったからこそ、あえて天皇陛下はご自分が亡くなられる前の最後のお務め、謝罪と慰霊の旅としてフィリピンに行かれたと私は思うんです。

そのフィリピンでは、例えばキリノ大統領という戦後すぐに大統領になった方は、奥さんと自分の子ども3人を日本兵に殺されています。狙撃兵に撃たれて、自宅の近くで奥さんと子ども2人を殺されます。3人目の子どもは、奥さんが子どもを庇って抱いているところを撃たれ、そのときに抱いていた2歳の女の子が路上に放り出されたのを日本兵は銃剣で刺し殺しています。むごいことです。彼にしてみれば、女房・子どもの家族を皆殺しにした日本兵、日本軍は大嫌いなはずです。でも、彼は大統領になったときに、モンテンルパ刑務所に服役中の105人の日本人の戦犯を恩赦して釈放しました。この戦犯は大体がBC級戦犯でしたけれども、10人弱の死刑囚も含めて釈放したのです。110万人の同胞を、しかも多くが一般市民を殺されたフィリピンの大統領が、こういう恩赦をするのです。我が身を振り返って、果たして自分にそうした許しができるのかと思います。できないだろうなと思うと、だから逆にフィリピンはすごいな、深い哲学や宗教があるからだろうなと思うわけです。

今、フィリピンでの日本人イメージはとてもいいです、親日的です。なぜかつてのひどい反日から現在の親日に変わっていったのかというと、少し悲しくて、つらい話でもあるんですけども、日本人の買春観光に始まる歴史があります。1965年末に大統領に就任したフェルディナンド・マルコス、初めは雑誌のタイムがアジアのケネディと呼んで表紙にしたりして人気がありました。けれども、1960年代末から70年代にかけて学生運動が盛んになり、社会不安が増大しました。共産主義の勢力も増大してゆきました。それで1972年に戒厳令を發布して社会秩序の回復と経済発展を進めようとしたのですが、翌1973年に第一次石油ショックがあったりして、初めの頃は経済発展がうまく行きませんでした。その後、経済は回復しますが、成長戦略の一環として、観光開発にも力を入れ始めました。

けれども、古代遺跡や自然の絶景その他の魅力が少なく、観光で来てくれる外国人が少ないために、結局は買春観光が盛んになっていったのです。その一環として、日本人の中年おやじのセックス・ツアーを組織したのです。もちろん大統領がではなくて、業者が、です。その背景には、やはりここでもベトナム戦争の

影があります。文化や自然に観るものがなくて観光客が呼べないのならば、すでにシステムとして米軍の基地の周囲やマニラにあったセックス産業の施設、つまりゴーゴーバーや売春宿のお客さんとして、外国人観光客を呼び込もうとする思惑です。米兵相手にそうした施設は潤っていたのですが、1970年代の半ば近くになるとアメリカ軍はベトナムから撤退してゆき、1975年にベトナム戦争が終わると、兵隊のお客さんがいなくなる。でも性産業の経営者たちは、何とか食いつなぐために、本物の兵隊の代わりに高度成長期に企業戦士やモーレツ・サラリーマンと呼ばれた日本人のおじさんたちを上客として呼び込み始めたのです。1970年代末頃の最盛期にはフィリピンに行った40万人の日本人の観光客の9割5分の中年男の団体買春観光客でした。

それはあまりにもひどいんです。私はちょうど1970年代の終わり頃にマニラに留学していましたからいろいろな話を日本側から、フィリピン側から聞きました。おおよそ日本人客は、たとえば某家電会社特約店の店主会の人たち100人から300人ぐらいが一グループになってジャンボのチャーター機に乗ってやって来る。だいたい皆んな同じ服装で、ゴルフの白いパンツに、アーノルドパーマーなどのロゴ入りのポロ・シャツにです。飛行機は夕方に着きますから、観光バス6台か7台で飛行場に迎えにいったって、ホテルにチェックインする。シャワーを浴びてさっぱりして、夕食に出かける前に大広間に行くと、女の子が200人〜300人、胸に番号札を付けて待っている。

そこで集団お見合いがあって、おじさんたちは目の色を変えて「この女がいい」「あの女がいい」と人買いごっこをする。あせって早く決めてしまうと後で後悔することになるし、ゆっくり構えてじっくり選ぼうとしたたらしい女の子を先に取られてしまう。そこで短い時間の真剣勝負というのが起こるんだそうです。決まったら女性の胸の番号札と自分の部屋の番号をマネジャーに伝える。それで一安心して、男たちは夜のシアター・レストランに行って食事をしながら酒を飲み、民族舞踊を見て9時ごろ帰ってくる。すると頃合いを見はからってドアをコンコンとノックして、選んだ女の子がやってくる。

そういう関係、生身の下半身の関係というのがさすがにひどいから、日本とフィリピンの女性団体やNGOが反対運動を起こし、それに突き上げられて日本の通産省が「団体パック買春ツアーをする旅行代理店の免許は取り消す」と1982年に政策を変えました。もちろん団体パックの買春旅行をアレンジできなくなりますから、代わりに何をしたかという、ピザの出前配達のように、ジャパゆきさんという形で、顧客が来ないならこちらから商品をお届けしますと、フィリピン女性を日本に送り始めたのです。それがフィリピンからのジャパゆきさんの始まり

となりました。

ジャバゆきさんというのは、ジャパンに行く女の子たちという意味なんですけれど、もともとは日本から南方に働きに行く、基本的には売春婦として働きにゆく、あるいは騙されて売られてゆく日本人をからゆきさん、と呼んだ言葉から来ています。戦前からマニラにはフィリピン人を相手とするからゆきさんが500人ほど、シンガポールに300人ほどいたそうです。戦後はしばらく途絶え、再開したときには、流れが逆になって主にフィリピンから日本に来るエンターテイナー（時にセックスワーカー）を指してジャバゆきさんと呼ぶようになりました。それが1980年代から1990年代までずっと続きました。

戦後のフィリピンは日本に対する反日感情が本当に強かったんですけれども、セックス産業を通した、もう身もふたもない言い方をすれば、下半身の交流を通して、生身の日本人を直接に見て親密に接して、兵隊でない普通の日本人は案外といい人かもしれないと思ってくれたようです。お金がらみのセックスだけれど、あまり異常な変態のことを要求しない。わりと淡泊さっぱりで、しつこくなく、金払いがよくてチップもよくくれる、というイメージがだんだん定着してきて、少なくともまあまあの上客として悪感情が薄れていったようでした。それで、だんだんと親日的になってきました。

もちろんジャバゆきさんの最初の頃は、エンターテイナーで来ても暴力団が介在したりして、強制売春その他のひどいことがあったのですが、教会のネットワークやNGOがサポートをしたりして、そういう悪業がだんだんと少なくなってゆきました。問題があれば教会に駆け込んで、教会が警察やNGOに連絡してサポートするとしっかりしたセーフティネットが働く。そういう意味で、暴力団が介入するような性産業というのは大幅に減ってきて、今はとてもフィリピンと日本はいい関係になってきました。

5. 日本のパートナーとして

たとえば、2014年の統計では、国際結婚をした1万7,198組のうち、日本人の男性と外国人妻の場合には、中国人とが41.7%、第2位がフィリピン人とが20.5%、第3位は韓国・朝鮮人と（在日韓国人・朝鮮人を含む）、第4位がタイ人とです。要するに、日本人の国際結婚の相手として、中国人に次いで第二位がフィリピン人なんです。

お配りしたB4版のプリントの一番最後のページには、右側に4つグラフがありますけれども、上から3番目「国別の外国人妻」をご覧ください。一位がずっと中国なんですけれども、2007年に瞬間的にフィリピンが追い抜いて1位になっ

たたことがあります。そのあと中国の1位がずっと続いていて、今はフィリピンが第2位、韓国・朝鮮が第3位です。

フィリピン人との国際結婚で重要なのは、まさしく草の根レベルの生身の人間のあいだで国際交流と異文化接触・摩擦・理解が日々、行われていることです。中国人との国際結婚でも同様な交流が行われるのですが、日本人と中国人は同じ漢字・儒教文化圏に属しています。遣隋使・遣唐使の昔から、日本が中国に学び中国文化を受け入れてきた歴史があるので、中国や韓国の場合には文化的に共通のものがあります。けれどもフィリピンはほとんどがキリスト教徒ですので、その意味では、異文化との接触と摩擦・交流・理解・共存・共生というものを家庭の中で、地域社会の中で実際に行っているのです。

日本人の男とフィリピン人の女性のカップルが第2位なんですけれども、同じように、外国人の夫と日本人の女性の場合は第4位になります。第1位が韓国・朝鮮、第2位がアメリカ、第3位の中国に続いて第4位です。

フィリピンは遠く感じるかもしれませんが、まさに隣で暮らしている身近な異文化なのです。今二十数万人のフィリピン人が、日本で永住あるいは市民権を取って暮らしていますけれども、草の根レベルの多文化共生、異文化理解を家庭や地域の中で実践しています。あるいは実践せざるを得ないのは、こういう国際結婚をしたカップルと親戚たち、周囲の人たちなわけです。かつてのエンターテイナーに代わって、最近では日本人と国際結婚をして、英語の教師をしたり、介護・養護の現場で労働力として働いている人が割りと多いです。国際結婚していなくても、フィリピンの若い人たちはIT労働者や外航船の船員としてとても優秀で、日本の企業に雇われて働いている人たちもたくさんいます。

フィリピンは、そういう意味では、日本にとってとても重要なパートナーなのです。そして重要なのは、フィリピンが若い国だということです。生涯特殊出生率という、1人の女性が平均して何人子どもを産むか、独身も含めて平均何人の子どもの産むかという、フィリピンは3.02人、日本は1.3人です。日本の人口はこれから大激減してゆきますが、フィリピンは逆にこの先右肩上がりで人口が増えてゆきます。一番最初に紹介したシンガポールも、韓国も台湾もアジアの先進国がこれから少子高齢化に入ってゆきます。中国も長く続いた一人っ子政策の結果、あと10年もしないうちに少子高齢化が急速に進んでゆくでしょう。それに比べて、フィリピンはこれから「人口ボーナス」と呼ばれる若年労働層がどんどん増えてゆきます。そういう意味では、日本にとってかけがえのないパートナーとなりうるのです。

また、今、あまり日本では大きく報道されていませんけれども、中国の南シナ

海への進出に関して、フィリピンがそれは国際海洋法条約の違反であると言って、ハーグの国際仲裁裁判所に提訴しています。1～2週間のうちに結果が出て、中国が全面敗訴とすると思っています。けれども、中国はその全面敗訴を前提にして、今さまざまなプロパガンダをしています。中国では法治という思想がまだまだ根付いていませんから、法律よりも政治力・軍勢力という姿勢を強めてくるでしょう。仲裁裁判所の判決を無視して、逆にいつそう支配の既成事実化をあせて進めようとするればアメリカとの対立が深刻になる恐れがあります。

その点、フィリピン人は英語ができるうえに、アメリカの植民地支配の影響で法治主義（リーガリズム）が徹底しています。ハーグの国際仲裁裁判所などに提訴する膨大な書類も、法務官僚がしっかりしていますし、アメリカで活躍する法律家・弁護士なども協力して、事実と関連法にもとづく万全の法論理を組み立てる。そういう意味で、中国にとっては目の上のたんこぶ、アメリカの出先国みたいに思われています。

実際、フィリピンはアメリカの植民地支配を受けたことにより、民主主義と英語による高等教育、そして法治主義が国と社会の根幹を成すようになりました。19世紀末の宗主国スペインに対するフィリピン独立革命が、アメリカの介入と、続くフィリピン・アメリカ戦争（1899～1902）の敗戦によって頓挫したことにより、フィリピンはアメリカの植民地にされ、その独立はアジア太平洋戦争後の1946年まで待たねばなりませんでした。その50年ほどの間に、アメリカの政治、経済、文化の圧倒的な影響を受け、その経験はある意味ではトラウマとなりました。

それは実は日本でも全く同じです。この写真を何回か見たことがあると思います。アジア太平洋戦争で負けて、日本は全面降伏をしたのは学校で習いましたよね。全面降伏をした後に、アメリカのダグラス・マッカーサー司令官が厚木に降りたときの写真です。丸腰です。敗戦の直前まで、鬼畜米英、本土決戦、一億総玉砕などと軍部の強硬派は叫んでいたのですが、マッカーサーは日本の敗戦から2週間も経たないうちに腰にピストルも持たずにやってきたのです。このときから、あるいはその前の全面降伏の受諾と敗戦の8月15日から1952年にサンフランシスコ条約が発行するまでの7年ほどの期間、日本はGHQ（連合軍総司令部）の占領支配の下に置られました。そのなかでアメリカは、ほぼ完璧な検閲を行い、民主化教育を徹底し、日本を封建主義と軍政から解放して自由と民主主義を与えてくれたのはアメリカだというキャンペーン、洗脳といってもいいか、を強力に進めました。だからアメリカに感謝し、大好きになるよう、親アメリカ的な考え方の植え付けを図りました。

実際、アメリカの占領政策は、すでに始まっていた東西冷戦のもとで、日本が

ソ連に接近することを阻むために、物心の両面での恩恵的な施策につながりました。また、それが大成功しました。アメリカがフィリピンを植民地支配したときに「恩恵的同化」を支配の正当化のスローガンとしたことと極めてよく似ています。両国での植民地支配と占領支配の大成功の体験が、その後のベトナム戦争やイラクやアフガンへの侵攻の失敗と深く結びついているように思います。

アメリカの表面的には恩恵的な、そして効率的な支配を受けたフィリピンと日本の両国は、その影響を深く受けたという一点できわめてよく似ています。けれども、フィリピンではアメリカの植民地支配を受けたことを忘れたいのに忘れられないトラウマになっているのに対して、日本では全面降伏と占領支配と検閲による洗脳を受けたことを、忘れてはいけなはずなのにすっかり忘れてしています。とても不思議な気がしています。

日本の戦後は、全面降伏のあと、占領軍としてダグラス・マッカーサー司令官が空から日本に舞い降りる。そして自由と民主主義を与えてくれる。一方フィリピンでは、日本軍がマニラに侵攻したとき、マッカーサーは潜水艦でオーストラリアに脱出しましたが、そのとき「I shall return.」という有名な言葉を残します。「約束する。絶対に帰ってくる。だから、おまえたち、それまで負けずにゲリラ戦をやって頑張れ」と激励して、マニラを去る。そして実際に1944年10月にレイテ島に戻ってきて、その時の上陸場面を再現したのがこの立像の記念碑です。海の方から解放軍としてマッカーサーがやってきたのです。

これは横須賀基地に配備されている米軍第7艦隊の空母ジョージ・ワシントンです。アメリカ軍の世界戦略は、航空母艦をメインとする機動部隊を10ユニット持っていて、それがアメリカの実力的な軍事力の中核となっています。もちろん戦略核兵器が最終的な保証になっていますが、日常的な紛争や戦争に対しては、航空母艦の機動ユニットに頼っています。そしてアメリカの国外に空母艦隊の基地があるのは、唯一、日本の横須賀だけです。以前は、フィリピンにも重要基地があったのですが、1991年にピナトゥポ火山の大噴火によって、東麓のクラーク空軍基地が甚大な被害を受けたために、米軍は25キロほど離れたスビック海軍基地も含め、フィリピン全土から基地を完全撤収しました。それまでスビック海軍基地は横須賀とともに第7艦隊の第二の母港でした。1960、70年代に就航していた空母ミッドウェイは、退役後にサンディエゴで保存展示されていて、その艦長室には横須賀とスビックの基地周辺の詳細な海図を置いた大きなテーブルがあります。日本とフィリピンは、アメリカを通して、実は深くつながっていますし、歴史的にアメリカの影響によって戦後の自己形成したという点でもそうです。

フィリピンの社会と文化の話をする前にこういう話をしたのは、フィリピンが

遠い世界のことでなくて、日本ととても深く結びついた歴史があり、今でもあり、将来もそうなんだということをまず分かってほしかったからです。

6. フィリピンの社会と文化

前にも言いましたようにフィリピンではカトリックがマジョリティだということが大きな特徴です。それと同時に、すごい貧富の格差があることも目につきます。マカティ市というマニラ大首都圏の商業とビジネスの中心地区には超高級住宅街がありますが、その近くにも貧しい人たちの暮らす地区、そしてスラム・スクワッター地区があります。この写真は、空港からマカティに向かう小さな橋の上から撮ったものですが、マカティ地区のビルの手前の池の回りに、パロンパロンと呼ばれる掘っ建て小屋が並んでいます。この子どもはタライのような小さな船に乗り、池に浮かんだプラスチック容器を集めているところです。この写真が映し出すような激しい貧富の差があります。

フィリピンが、宗教的・文化的にカトリックを基盤としているのはスペインの植民地支配を受けたからです。16世紀の後半から約350年にわたってスペインの支配を受け、だからカトリックがマジョリティになりました。スペインが来るのがあと50年ほど遅れていたら、インドネシアからミンダナオ島まで及んでいたイスラム教の影響がマニラまで及んでいたことでしょう。交易ルートをつたってイスラム教は広がってゆき、その頃のマニラはイスラム商人の交易ネットワークに組み込まれていました。

これはホセ・リサルという国民的英雄が処刑されるシーンを再現したジオラマです。修学旅行の生徒たちがそのジオラマを見ている。マニラの中心部にあるリサル公園の脇に立てられています。リサル公園の中心部にはリサルの記念塔があり、天皇皇后両陛下が献花されたことを初めに言いましたよね。なぜホセ・リサルはスペイン政庁に処刑されたかということ、フィリピンは1896年（明治29年）8月に、カティプーナと名乗る革命秘密結社がスペインに対して武装蜂起して革命を起こします。リサルは、その革命を直接に指導したわけではないんですけど、彼がスペイン語で書いてドイツで出版した小説や評論が、当時ヨーロッパに留学中のフィリピン人エリート層の子弟らに大きな影響を与え、直接間接にその革命をそそのかした、励まして革命に導いたからという理由で死刑判決を受け、その年の12月末にスペインに処刑されたのです。

リサルの処刑は、その日を革命の指導者であったアギナルド将軍が国民英雄と定めて記念日とし、さらにはアギナルドの革命政府を倒したアメリカがスペインの無慈悲で悪逆な植民地支配の犠牲者の象徴として国民英雄に祀り上げたこと

により、フィリピンの英雄として国民一般に受け入れられ定着しました。スペインにそれだけ悪いイメージを押し付けることにより、アメリカの介入と支配がフィリピンを解放し発展してゆくために手助けしてあげるためだったので、という理由付けとなりました。処刑された12月30日は今も祭日になっています。

リサールは1982年、21歳の若さでスペインに留学し、その後、フランス、ドイツなどの大学で計5年間学びました。1988年から1992年まで二度目の留学をしています。彼は小説家であり、スペイン語、ラテン語、英語、ドイツ語、フランス語など10以上の言語をマスターした語学の天才であり、スペイン語で2冊の長編小説を書いて出版しています。二度目の留学の帰りには香港に一時立ち寄って、そこで眼医者として医院を開き、大成功して収入も良く、安全で居心地の良い生活を楽しむのですが、やっぱりスペインに支配された祖国を救うために帰らなければいけない。帰れば、自分はつかまって処刑されるかもしれないけれど、それでも祖国のために働かなければと、帰っていくんですね。そして帰ったら、革命の勃発とともにその背後の黒幕と疑われて逮捕され、銃殺刑に処せられるわけです。

そうしたリサールの生き方というのは、カトリック教徒であるフィリピン人にとっては、まるでイエス・キリストの生き方と同じです。イエス・キリストは預言：「預言」とは先を予想するのではなくて、神の言葉を預かるという意味ですが、すなわち人類の救いのために遣わされた神の子として、その預言が成就するためにイエスは、エルサレムに上ってゆくのです。エルサレムに行けば十字架の磔刑になるというのが分かっているのに、それが神のみ心であるならば、静かにそれに従い受け容れるためにエルサレムに上がり、そして十字架の上で絶命するのです。リサールも同じように、自分はヨーロッパで、あるいは香港で亡命生活を送れば、豊かで安楽な生活ができるのに、やはり自分に与えられた使命を自覚して祖国に帰ってゆき、やっぱり捕まって処刑されてしまうのです。

それと同じことが1983年のベニグノ・アキノという上院議員にも起こりました。彼は、1960年代の後半から1980年代の半ばまで、20年以上も独裁的な政権を保ったマルコス大統領の一番の政敵でした。その時代は冷戦の時代で、共産主義の恐怖が大きかったので、アメリカは、そして日本は、東南アジアの独裁政権・軍事政権を、例えばフィリピンのマルコスを、インドネシアのスハルトを、韓国の朴正熙（パク・チョンヒ）を、あるいは台湾の蒋介石（しょうかいせき）の政権を全面的に支援したんです。

このベニグノ・アキノ上院議員は、マルコスの最大の政敵だったために、1972年に戒厳令が敷かれたときに、すぐ政治犯として逮捕され、牢獄の独房に監禁さ

れました。1977年には、軍事法廷で死刑の判決を受けますが、その後、心臓病が悪化し、アメリカで手術を受けることを条件に1980年に釈放されました。心臓のバイパス手術が成功し、そのままハーバード大学の客員研究員になって、家族と一緒にボストンで安全で楽しい亡命生活を送っていたのですが、3年ぐらいボストンで生活したあと、フィリピンの政治状況がきわめて悪くなり、マルコス大統領があまりにも強権的でひどい政治をして人々の反対が高まってきたので、「自分だけ安全地帯にいてはいけない」と言って、彼はハーバード大学のフェローのポストを捨ててフィリピンに戻ってくるのです。1983年8月のことです。

戻ってくるときは、リサールと同じように、あるいはイエス・キリストと同じように、フィリピンに着いたら殺される可能性が大きいと予想し、実際にマルコス夫人のイメルダは「帰ってきたら殺されるかもしれない、だから帰国を思いとどまるように」と警告していました。確かな情報として、殺される可能性が大きいからと警告し、帰国を思いとどまらせようとしてしました。彼が帰ってくるとフィリピンの反体制運動の核になりますから、何としても帰ってくるのをとどめようとしたのです。

それが分かって、彼は事前のマスコミのインタビューなどに答えて、「私が帰れば殺される可能性がある。多分マルコスは私を殺そうとすだろう。でも、マルコスの弾圧に苦しむ国民とともに私も苦難を甘受するために帰らなければいけない。自分だけ一人安全地帯にいて、のうのうと生きることなどできない。『一粒の麦がもし死なば、豊かな実りをつけん』と聖書のいう、その一粒の麦となって、フィリピンの皆のための解放と、実りをもたらすんだ」と言い、彼は帰ってゆきます。

そして実際、飛行機がマニラに着いて、タラップを降りてくるときの途中、地上まであと3段ほどのところで機内に入って彼を連行した兵士に後ろから後頭部を撃たれて、そのままバタンと前のめりに倒れていく。その後、すぐにタラップの近くに停めたバンの後部からふらふらと男が出てきて、後ろから兵士に撃たれ、アキノの遺体の近くに倒れる。政府は、アキノを暗殺しようとしてきた犯人を、警護の兵士がアキノを守ろうとして撃ったと説明しましたがけれども、誰もそれを信じませんでした。アキノの帰国に備え、空港が閉鎖状態で完全に軍のコントロール下にあったのですから、外から暗殺者が紛れ込むことができるはずがありません。

いずれにしても、リサールがキリストと同じ運命をたどったというか、キリストをモデルとして自分の身を処したと同じように、アキノも自分の安全と家族の幸せではなくて、祖国の解放と救済のためにマニラに帰ってきて殺されたわけで

す。少なくとも、カトリックの信仰にもとづき、イエス・キリストとリサールを従うべき理想像、真似るべき模範として捉える深い文化の神話のなかで、ベニグノ・アキノの帰国と暗殺は理解されたのです。そうした物語を、新聞や雑誌は、アキノの帰国前の言動やインタビューをとおして、紡ぎ出してゆきました。

アキノの暗殺というか、殉教と殉国という祖国への献身を目の当たりにして、マニラの人々の意識の変化、政治的覚醒と勇気が生まれました。暗殺が導火線の最初の火花となり、それまではマルコスの戒厳令を恐れて、家の中に引きこもってデモには全然出なかった普通の市民が街頭のデモに出始める。最初は、遺体の安置されたサントドミンゴ教会に弔問のために人々が次々に昼夜を問わず大挙して訪れ、そのことがマルコスの仕打ちと体制そのものに対する静かな怒りを無言で表現しました。さらには、彼の遺体が郊外の墓地に運ばれるまで、遺体を乗せた車が教会からマニラ市内を迂回して7～8時間をかけてゆっくりと進み、人々は最後の別れと敬意を示すために沿道を埋め尽くしました。100万人を超える人たちが街頭に出て、熱い日差しにジリジリと照らされて焼かれ、午後には激しい雨に降られながら長い時間、じっと葬列を待つこと自体が、イエスに従って自ら受苦する態度であり、マルコス体制に対する不満と抗議の意思表示となり、皆が、自分ひとりだけではないんだということを確認しあう場となりました。

この葬列を迎える人々の静かな意思表示が、以後、街頭でのデモや集会に結びつき、反マルコスの運動が盛り上がりてゆきました。それまでは、マルコスを恐れてデモに参加することもなく「羊のようにおとなしい群れ」だったマニラ市民が、アキノの暗殺に触発されて目覚め、立ち上がり、デモに参加していったのです。そうした平和的な街頭のデモと集会は、それ以後も盛り上がり続け、マルコス大統領もアメリカに対して全国的には自身が広く支持されていることを証明するために、繰り上げ大統領選挙を実施することに同意しました。

1986年2月に実施された繰り上げ大統領選挙では、マルコス大統領と、暗殺されたベニグノ・アキノの未亡人で野党のコラソン・アキノ候補とが互いに当選を主張し、事態が混迷してゆきました。そんななか、2月22日、フィリピン国軍改革運動の若手派将校らに率いられた数百人の部隊が決起し、アキノ大統領の当選を支持してアギナルド基地に立てこもります。人数と武器のうえで圧倒的に不利な状況のなかで、カトリック教会のシン枢機卿がカトリック教会が運営するラジオ・ベリタスを通じて、「われわれの友である決起軍を守るよう、基地の前に集まってほしい」と呼びかけました。それに応じて、マニラ市民は、武器をもたず基地の前に集まり、ヒューマン・バリケードを築き、基地に立てこもる決起軍をマルコス側の国軍の攻撃から守ったのです。

地上からは戦車と装甲車で、上空からはヘリコプターで決起軍を粉砕するために送られた国軍部隊に対して、数十万人が集まってヒューマン・バリケードを築いたマニラ市民は、まったくの非武装でした。しかも、戦車や装甲車と対峙する前面には、カトリック教会のシスターや修道士たちが並んで十字架やマリア像をもって祈り、また一般市民の女性が兵士に花束をささげたりしました。圧倒的な武力を有する国軍の鎮圧部隊でも、静かに祈りを捧げる修道士やシスターたちにはやはり発砲できないんですね。しかも、そうした最前線には、メディアのカメラマンも大勢いますから、手を出せません。

こういうときの鎮圧の仕方というのは簡単で、集まっている群集に対して3～4発バンバンバンと撃つんです。3～4人が怪我をしたり殺されると、集まっている人は怖くなり、パニックになって、クモの子を散らすように逃げ出します。そうした後に政府は、群衆に紛れ込んだ共産党のゲリラが先に攻撃してきた、挑発してきた、だからやむを得ず防御のために撃ち返した、と言い訳します。しかし、ヒューマン・バリケードの修道士やシスター、非武装の市民には最初の一発の引き金が引けないんですね。兵士の側もカトリック教徒ですから、いくら荒くれ男たちであっても、もし本当に宗教者を殺したら、いつか自分が死んだ時に天国に入れてもらえることはぜったいないだとうと思うわけです。それで何もできない。圧倒的な武力がありながら、無力化されてしまう。事態が動かず、硬直状態のまま時間が過ぎてゆく。

事態の推移は同時に、衛星放送を通じて実況中継で世界に放映されていて世界中が注視していますから、国軍の上層部でも、流血を招く強行突破を命令することができない。結局、4日間の緊張した対峙の時を過ごし、最終的にマルコス一家はヘリコプターでマラカニアン宮殿からクラーク空軍基地に避難し、さらにそこからハワイに亡命しました。マルコス独裁体制は崩壊し、コラソン・アキノ政権が誕生した次第です。非武装の市民がヒューマン・バリケードを築き、国軍を無力化してほぼ無血の革命を成功させたことから、ピープル・パワー革命と呼ばれるようになりました。

この平和裏の革命のやり方、すなわち独裁的で強権的な体制に対して、首都の一般市民が非武装のままいちばんの目抜き通りや中心の広場を占拠し、退陣を迫るというスタイルは、衛星放送で全世界に伝えられ、多くの国で刺激と示唆を与え、その後の民主化要求運動のモデルとなりました。そのあとの韓国（6月民主抗争、1987）でも、ミャンマー（8888運動、1988）や中国（天安門事件、1989）でも、同様なスタイルのデモと運動が起きましたが、フィリピンとは異なり、最終的には鎮圧されて平和革命は成就しませんでした。首都の中心部を非武装市民

が選挙するというモデルというのは、最終的にロシアでも、東ヨーロッパでも、1980年代の後半から1990年の初めにかけて踏襲され、東ヨーロッパ諸国の社会主義政権の崩壊とソ連邦の解体にまで至りました。冷戦の終わりに、フィリピンのピープル革命が少なからぬ影響があったというのは、すごいと思いませんか？

7. 写真で見るフィリピン

そうした戒厳令、独裁体制を倒すために動いた人々を支えた世界観や精神的な意味世界というのが、フィリピンの場合はカトリックでした。カトリックはさまざまな儀礼を行うので、南米やヨーロッパと似たようなものもたくさんありますが、フィリピン的な儀礼と思われるものを、これから幾つか紹介してゆきます。これはマニラの下町のヘソのような地区にあたるキアポのブラック・ナザレンの1月のお祭りです。キリストが黒い肌をしているので、フィリピン人と同じだと親近感があってとても人気があります。この十字架を担ぐキリスト像を中心として、さまざまな信徒グループの集団が地区を巡る行列（プロセッション）をするのです。

次のスライドは、フィリピン中部のビサヤ諸島のパナイ島アクラン州のフェイス・ヒーラーです。病気になった人を信仰の力で治すという人で、彼は祈りを唱えているうちにキリスト教の聖人が自分に乗り移ってきて意識を失い、その聖人の言葉を語って病気の原因を教えたり、治療法を示唆したりします。人々は床にひれ伏して、その言葉を聞きます。こうしたキリスト教の意味世界の中で人々は生きている。もちろん全員がそうではなくて、敬虔の深い人たちがそういう意味世界の中に生きているのです。

これは聖週間（ホーリーウィーク）の儀礼のひとつです。キリストは十字架に付けられて、3日後によみがえって昇天しますが、その十字架に至る直前の1週間を聖週間といい、儀礼で再現してゆきます。フィリピンの場合の聖週間というのは、キリストの死からの復活よりも、キリスト自身が十字架を背負いながらゴルゴダの丘に上ってゆき十字架につけられて絶命する、その苦難の過程を追体験する意味がとても重要です。ペニテンシアと呼ばれる儀礼では、自分で背中をむち打ち血を流しながら街なかを歩いてゆきます。キリストのそうした受難を自身の身体の痛みとして実感し、キリストが十字架に至るまでの苦難と苦痛を想起してゆくのです。こうした儀礼は、自身が貧しく辛いという個人的な思いと、フィリピンが植民地支配を受け、政治的に抑圧され経済的に搾取され、苦しい状況に置かれてきた歴史とを、キリストの苦難に重ね合わせて追体験する機会になって

いるわけです。こうした儀礼を自ら実践する人とともに、そういう人を歩道から見物人として見るだけの人もキリストの受難を思い起こすことで、儀礼を実際にする人が観客を巻き込みながら自身とフィリピン人ぜんたいの受難とを、直接間接に想起させる経験ともなっています。

これらの写真は全部私がマニラの南に隣接するカビテ州のカウィット町で調査したときのものです。頭にオリーブの飾りを付けて、その葉を顔まで垂らして、誰の顔だか分かりません。顔が見えないことによって、どこどこにあそこに住んでいる誰兵衛ではなくて、正体の分からない匿名無名の人間として、イエスに重ね合わせて理解されるようになるのです。

これはシナクロというキリストの受難劇の一場面です。聖週間の間の7日間のキリストの受難の日々を、毎晩、仮設舞台の上演で再現してゆくのです。エルサレムに上り、裁判を受けて十字架の刑が決まり、実際に十字架を担いでゴルゴダに上がり、十字架にかけられてゆく。そうしたシーンを再現する演劇です。こういう演劇を地方ごとに広場で上演するのです。

これは私の調査ではなくて、インターネットから取り入れた写真です。熱心な信者は、キリストの受難になぞらえて自身もペニテンシアという儀礼をするのですけれども、そのいちばん激しいやりかたは、自分も十字架に張り付けられてしまうことです。両手と両足首に釘を打ち込まれ、十字架にかけられる。本当にトンカチで手と足に釘を打つんです。こういう形で生々しくリアルにキリストの苦難を再現することを通して、キリストの生き方と死に方が自分自身の中に深く埋め込まれ、それに従って生きるということを学んでゆくのです。教科書ではなく、儀礼と行動をとおして学ぶのですね。

今まで、日本と違うキリスト教の体験の仕方、イエスに従った生き方をする範型のまねの仕方というのを紹介したんですけれども、儀礼で血を流したり、ちょっと強烈な印象でしたでしょうか？これからは、今までの経済、社会、文化とは少し違って、フィリピンの自然について写真で紹介してゆきます。私はダイビングが大好きなんですけど、フィリピンのサンゴ礁と熱帯魚の美しさ、砂浜の美しさは世界有数だと思います。パラオ島とか、インドネシア・スラウェシ島メナドのブナケン島とか、マレーシアのシパダン島とか、いろいろなところで潜っていますが、そういう世界的に有名なところと比べても、フィリピンは気楽に行けて、サンゴ礁と熱帯魚がシュノーケリングで楽しめたり、とてもいいところです。

これは今年の4月に行ったセブ島の南端のオスロブという町の300メートルほど沖合でできるジンベイザメ・ウォッチングです。ジンベイザメとか、マンタとか、普通はなかなか会えません。でも、オスロブは、世界で唯一、ジンベイザメ

の餌付けに成功していて、間近に見ることができます。幅20メートルほどで浜辺と並行して張られた300メートルほどの長さのロープの間を、ジンベイザメが20匹ぐらい順番に列をなして泳いでいます。餌付けしている漁師が5、6隻いて、餌のアミを海に投げ入れると、そこをジンベイザメがゆっくりと大きな口を開けて、順番に食べてゆくのです。6～7メートルぐらいある大きなジンベイザメが目目の前の2～3メートル先を泳いでゆくのですから迫力があります。

これは近くのサンゴ礁と熱帯魚です。2メートルぐらいの深さでとてもきれいです。これはホーンビルというサイチョウです。くちばしがとても大きいのが特徴です。パラワン島のエル・ニドというリゾートで撮りました。

最後にもう一度、お配りしたB4の資料をさっと見て、日本とアセアンの関係の全体像を復習しましょう。

1ページ目にASEANの概要があります。最初に言いましたように、ASEANというのはEU（ヨーロッパ連合）と比較したらとても面白いです。面積としては、ASEANのほうが少し小さくて、EUは日本の11倍、ASEANは12倍です。国としてはEUが28カ国、ASEANが10カ国です。大事なことは、ASEANは世界最大のイスラム教徒の人口を擁していることです。キリスト教でも大きな人口がいます。キリスト教徒の人口が一番多いのはアメリカですけれども、アメリカはプロテスタントの国です。なのでカトリックでいうと、フランス、ブラジルに次いで、世界の3本の指に入る人口を擁しています。あとASEANには、仏教があり、儒教があり、道教があり、かつてのヒンドゥーの影響も残っています。そういう意味では、まさに多文化共生の社会なのです。

なおかつ、東南アジアというのは、フィリピンはスペインとアメリカの植民地支配を受け、だからカトリックと英語が国民のアイデンティティと深く結びついています。インドネシアはオランダの植民地支配を受けましたし、マレーシアとミャンマーはイギリス。ベトナムとカンボジアとラオスはフランスの植民地支配を受けました。西洋列強が植民地としたことで、まさに西欧の国々に固有な歴史文化の影響も、それぞれの国に色濃く残っています。そういう意味でも多文化です。

1960年代70代のベトナム戦争のときには熱戦場となり、資本主義陣営と共産主義陣営に真っ二つに分かれて対立したところでした。80年代には共産主義陣営の内部で中国とベトナムが戦争したり、一国での内戦が続いたところもありました。でも、そうした対立を超え、文化的宗教的な多様性、植民地本国の多様性、それ以前の古代王国の多様性や、古代文明として中華やヒンドゥーの大伝統を受け入れてきた基層の多様性を超えた共存と共生をしています。さらには多様性こそを

新しい社会建設と経済発展のための原動力、ダイナミズムの源としています。そういう意味では、東南アジアというのはとても面白いです。

2 ページ目を見ますと、各国の GDP の比較があります。ASEAN は名目では 24,780 億ドル、日本の GDP の約半分強になります。表 5 の「1 人当たり GDP」ではシンガポールは 56,000 ドルで、日本の 36,000 ドルに比べると、1.5 倍にもなります。ブルネイは石油が出ますから税金がなくて、教育は無償で何でもありのいい世界です。ASEAN 全体としてはまだ 3,000 ドルで少ないです。それは、ラオスとか、ミャンマー、ベトナム、カンボジアなどがあるからですが、逆に言えば、それだけの大きな伸びしろがあるということです。

次のページで、日本と ASEAN との関係をみると。左の上の日本の対 ASEAN 貿易は、ASEAN 全体として今 14.7% ですが、中国の 20.5% にいずれ肉薄してゆくだろうと思います。

あと、細かい統計の資料が入っていますので、関心がある人は、ご自分でも少し調べてみてください。

5 分ぐらい質問の時間を取ろうと思ったのですが、ちょうど時間で終わってしまいました。でも僕はまだ時間がありますので、質問がある人は、どうぞ手を上げてください。次の授業もあるかもしれません。

司会

皆さん、質問はいかがですか。せっかくの機会です。

今までの諸先生は、中国あるいは朝鮮半島といったそれぞれの国の社会文化について説明する中で、アジア的な要素を引き出そうというご説明をされたかと思っています。

今日の清水先生のお話は、具体的に東南アジアという地域の中のフィリピン、その中での社会、文化、そして政治まで、立体的に、時系列的に、歴史的にお話ししてくださいました。ですから、非常に奥の深いお話だったかと思います。

実は、ここに来る直前に教えていただいたんですが、清水先生は文化人類学のご専門ですが、大学の教員としてはスタート時点では政治学のご専門でした。それだけに、恐らく文化人類学者で、ここまで歴史、経済、社会、文化、すべてにわたって、立体的に東南アジアというものをご説明していただける機会がなかったかと思います。

今日お話しいただいた話は非常に密度が濃い。日本と関連付けて、日本は第二次世界大戦で敗北して、その敗北を抱き締めながら経済復興を遂げていった。今、

周回遅れの経済成長を遂げるフィリピンも、同じように、スペイン、アメリカの植民地支配という屈辱を乗り越えつつ、市民革命を起こしながら、民主化及び経済発展の道を進めていく。そういう日本とフィリピンの類似性と、そして、好ましくない事例もありましたけれども、具体的な結び付きまで含めて、非常に分かりやすく説明して下さったんです。

もう一度皆さんに伺いますが、質問がありましたら、ぜひ。いいですか。はい。

学生

清水さん、ありがとうございました。東南アジアの人たちって、どういう人たちが多いのか聞きたいです。国民性みたいな感じ。

【清水先生】

民族的には、マレー・ポリネシア系という人たちが、インドネシア、フィリピン、マレーシアなどに住んでいます。海域部東南アジアと呼ばれる地域です。言葉もマレー・ポリネシア系の言語です。インドネシア語とマレー語はとても良く似ています。言語と民族をほぼ同じに考えると、大陸部は複雑です。でも、大ざっぱに言うと、シナ・チベット語系のビルマ、オーストロアジア語系のベトナムとカンボジア、タイ語系のタイ、ラオなどに分けることができます。また、それぞれの国で国内に異なる言語（ただし同じ言語系）を話す民族が数十から100、200といますから、その点で、国内の多様性もとても大きいし、異文化共生ということをおのずとやっています。

私の同僚で友達 Ney San・バデノック准教授が調査しているラオスの村では、数百人の人口なのに、6つの異なる民族・言語グループに属する家族が住んでいて、家族のなかではそれぞれの民族の言葉を使いますが、村人は誰でもそれらの異なる言葉が分かるので、その場その場で使われる言葉が変りながら、でも問題なくコミュニケーションができています。究極の多言語・多文化共生が小さな村で実現しているわけです。バデノックさん自身も語学の天才で、タイ語やミャンマー語のほか10以上の少数民族の言語を話せます。

文化人類学のアプローチから言うと、東南アジアの各国・諸社会の親族関係は双系で、子どもは父親と母親の両方の親戚ネットワークの一員として組み込まれます。その点で、しかりとした父系血縁制度をもつインドや中国・韓国とは大きく違います。日本は、とすれば父系と言われたりしますが、父系とは生まれてきた子どもが所属する親族集団が父親の側のみという原則です。日本は、子どもは両親双方のネットワークに入ってゆきますから、その点では東南アジアと同じ

です。

国民性については、説明がなかなか難しいです。ひとつの国の住民が、同じ国民であることを意識したり、無意識のうちにも似たような考え方や振る舞いをするのが前提になっている議論だと思います。日本で国民性を議論することが頻繁になされるのは、やはり明治維新以降の富国強兵の近代化と国民国家建設のプロジェクトがとてもうまく行き、国民としての共通性や均質性が高くなったからだと思います。小中学校教育が全国の津々浦々に普及し、共通カリキュラムで教えてきた成果と言えるでしょう。

それに比べて、東南アジアの国民性についてあえて言えば、公的な制度や枠組みによって縛られる程度が弱いので、だからその分、個々人の自由な行動の余地が広く、外からみると柔軟な対応が可能になっています。制度や組織がガチッと保証してくれないので、まずは個々人との関係を大事にしようとして、相手を怒らせない、失望させない、少なくとも表面的には優しくて柔らかな人間関係を維持するようにしています。たとえば、今会っている人との関係を大事にするあまり、時間がのびて次の約束の時間に間に合わないとか、というのがよくあります。かつて「ラバー（ゴムの）タイム」、伸び縮みする時間などと言われたのですが、そんなことも、社会のあり方と関係しているようです。

司会

あと1問ぐらい、いかがでしょう。

学生

貴重なお話をお聞きして（ご披露いただき？）ありがとうございます。

今、卒業研究で、フィリピンの宗教と民主化の発展とか停滞というのを伺えて（?）、調べていきたいと考えています。

歴史的にキリストをホセ・リサルだとか、さっきのように・・・じゃないですけれど、なぞらえてというのがすごく印象的だったんですけれど。そのあと、民主化してからの宗教はどのように、・・・ナショナリスト（?）とかに・・・したのかをお聞きしたいです。お願いします。

【清水先生】

1986年のピープル・パワー革命のあとに、コラソン・アキノ大統領が誕生したのは、講義のなかで説明しましたように、ご主人のベニグノ・アキノが白昼のただ広い空港で、軍による厳戒体制のなかで暗殺されたことと深い関係がありま

す。

今月末で大統領の任期が終わるノイノイ・アキノは、コラソン・アキノ大統領の長男です。彼は、大統領選挙のときに、3番手ぐらいでずっとウロウロしていた候補だったんですけれども、ちょうど選挙戦で低迷していたときに母親が死にました。するとすべてのマスメディアがコラソン・アキノ前大統領の思い出と、ピープル・パワー革命による民主化の実現についての特集記事を繰り返し組みました。その語り方が、ある意味とてもカトリックの宗教的な語り方になって、それでノイノイは急浮上して、3番手から一躍トップランナーになって、そのまま当選したんです。

お母さんも息子も、正直言って、政治家としての経験と力量はほとんどなかったのですけれども、宗教的に敬虔であるということと、汚職をしないということ、真面目であることが国民の信用と信頼を得て、多くの票を集めました。もし宗教と政治のほうに関心があって卒論を書くのなら、私がピープル・パワー革命について、『文化の中の政治：フィリピン「二月革命」の物語的理解』という本を書いていますので、ぜひ参考にしてください。フィリピンの宗教・文化と政治に関心をもってくれる学生がいて、とてもうれしいです。ありがとう。

司会

フィリピンの民主化が1986年で、皆さんが生まれる10年以上も前です。

アジアで民主国は、それ以前は日本しかなかったわけです。自らの力で民主化をしたアジアで最初の国ですよ、先生。

【清水先生】

はい。

司会

そういう意味で、フィリピンは、歴史的にも、経済的にも、政治的にも、非常にユニークな、そして日本とも非常に結び付きの深い国です。

今日はたくさん美しい写真を見せていただきましたので、ぜひ留学のメニューの一つに加えていただければと思います。

実は、清水先生はここにいらっしゃる前に、長崎大学の別の研究会でご講演を90分ほどされて、そして皆さんの授業にもご講義をいただいています。3時間以上、話っ放しなんです。けさ、京都からこちらにお願いいただき、そして3時間のお話をいただいて、非常にお疲れだと思います。密度の濃いお話をしていただ

いて、非常に良かったと思います。

【清水先生】

こちらこそ、ありがとうございました。

東南アジア研究所の教員として、みなさんに東南アジアへの関心を持ってもらいたいという宣伝のつもりでお話ししました。本当に将来のキャリアのことを考えるときに、東南アジア・ASEANをぜひ念頭に置いてください。

あと、もう一つは、英語はやっぱり勉強したほうがいいですし、語学留学をするのならばフィリピンはお勧めです。また Skype で英語のレッスンをするサービスもフィリピンにはたくさんありますよ。

今日の講義に関して、どんな感想でもいいんですが、書いていただければうれしいです。どうぞよろしく。

司会

分かりました。では、今日、清水先生のお話を伺って、知らなかったこと、面白かったこと、それから気になったこと、そういったことに関して書いていただくことを課題にします。

【清水先生】

ちゃんとした課題があったほうがいいのか。自分で調べてとかいうよりも。

司会

それは・・・考えなんですけど、むしろダイレクトに反応があるのがこちらのほうかもしれません。

【清水先生】

今日の話で触発されたこと、あるいは刺激を受けたことがあれば、そのフィードバックで聞きたいですね。研究所に行ってから10年ほど、あまり若い人との接点がなかったので、こういう機会は本当に良かったです。どうもありがとうございました。